東京都へのたばこ税は1149億円

「令和元年度（2019年度）たばこ税納付見込額調べ」

東京都連合会調べによる

先ごろ、東京都連合会（水谷章道会長）調べによる「令和元年度（2019年度）たばこ税納付見込額調べ」が公表された。

それによると、東京都は1162億円、特別区（23区）の合計は762億円、都下市町村（30市町村・島嶼部除く）の合計は226億円となっており、東京都全体では1149億円となっている（単位未満四捨五入）。

過去5年間の東京都全体の税額の推移は、1268↓1227↓1162↓1151↓1149（単位:億円）で、たばこ税増税や喫煙規制の強化などによる販売数量（全国ベース）の大幅な減少（2015年度・1833億本⇩2019年度・1181億本と約36％の減）にもかかわらず、東京都におけるたばこ税納付見込額は、緩やかな減少（2015年度・1268億円⇩2019年度・1149億円と約9.4％の減）となっている。

ちなみに、たばこ1箱490円の場合、税負担額は実に309・42円（63・1％）となっており、このうち国たばこ税が116・04円（23・7％）、道府県たばこ税が18・6円（3.8％）、市区町村たばこ税が113・84円（23・2％）、たばこ特別税が16・4円（3.3％）、消費税が44・54円（9.1％）である。

東京都全体の住民1人当たりでは8305円

東京都全体のたばこ税納付見込額（1149億円）を、東京都の住民1人当たりに換算した場合の税額は8305円となり、これは、東京都に住むすべての人が、年間8305円の税金を納めていることになる（東京都調べによる2019年度の住民数は1383万4925人）。

また、**別掲**の「たばこ税納付見込額」のベスト5を住民1人当たりに換算した、たばこ税納付見込額は次のようになる（順位は納付税額。カッコ内は住民数。単位未満四捨五入）

①港区＝2万3195円（26万人）②新宿区＝1万4636円（35万人）③足立区＝7197円（69万人）④大田区＝6582円（73万人）⑤江戸川区＝6715円（70万人）となるが、このうち、第8位の千代田区の1人当たり税額は少住民数ながら5万7028円（約6万人）と、突出しており、次いで、港区、新宿区が多い。

この3区は、いずれの区も昼と夜との人口比率で昼間の方がはるかに夜を上回っている。つまり、昼間の流入人口（通勤者）が、住民数よりかなり多い区である。首都圏からの通勤者の多くが、地元ではなく勤務先などで〝たばこ〟を買い求めているということである。

◇　◇　◇

税額ベスト10の中で、足立区、大田区、江戸川区、世田谷区、江東区、板橋区、練馬区などの区は、いずれも1人当たり税額が1万円以下であり、昼と夜との人口比率では、夜間人口の方が多い（ベッドタウンに近い）区である。

このことからだけでも、**「たばこは地元で買いましょう」**ということが、**「たばこ税　貴重な財源　地元の宝」**（「たばこ税の財政貢献を地域社会に強くアピールする標語」入選作より）であり、**「ふるさとの　強い味方は　たばこ税」**（同）であることがわかる。

たばこ販売店のみなさまはもとより、たばこ関係者は、より一層強く**「たばこ税　禁煙よりも　分煙で　地域潤す　高額納税」**（同）であり、**「地方たばこ税　1本当たり約7円　積もり積もって1兆円」**（同）であることなどを、アピールしていく必要があるであろう。

たばこ税納付見込額・ベスト10

（単位:百万円）

順位	行政区	税　額
1	港　区	6,039
2	新宿区	5,100
3	足立区	4,976
4	大田区	4,835
5	江戸川区	4,701
6	世田谷区	4,177
7	江東区	3,865
8	千代田区	3,761
9	板橋区	3,400
10	練馬区	3,393

高温加熱型「プルーム・エス」専用たばこスティック
キャメル2銘柄「パープル」「ブラック・ミント」が新登場
〝メンソール特化型〟デバイス使用でより旨い
9月1日より順次、全国で販売開始　JT

JTでは、9月1日より順次、高温加熱型の加熱式たばこ用デバイス「プルーム・エス」において、専用たばこスティック「キャメル・メンソール・パープル」と「キャメル・ブラック・ミント・メンソール」の2銘柄を、全国のコンビニエンスストア及び全国の一部販売店で発売する。

「キャメル・メンソール・パープル」は、芳醇な甘みのベリー・フレーバーが愉しめるメンソールタイプ。また、「キャメル・ブラック・ミント・メンソール」は、クセになる香りのハーバルミントを愉しめるメンソールタイプである。

なお、本商品は、「テイスト・アクセル」を搭載した〝メンソール特化型〟デバイス「プルーム・エス・2.0」で使用すると、より美味しく愉しめる。

商品概要などは次のとおり。

●**キャメル・メンソール・パープル・プルーム・エス用**＝内容物:たばこスティック各20本／喫味:メンソールタイプ／価格:460円

●**キャメル・ブラック・ミント・メンソール・プルーム・エス用**＝内容物:たばこスティック各20本／喫味:メンソールタイプ／価格:460円

キャメル・メンソール・パープル

キャメル・ブラック・ミント・メンソール

低温加熱型「プルーム・テック・プラス」専用カプセル
カクテルをイメージした新フレーバーの
「モスコミュール」「ピニャコラーダ」2銘柄
8月3日より順次、全国で発売中　JT

メビウス・エナジー・モスコミュール・ミント

メビウス・エナジー・ピニャコラーダ・ミント

JTでは、8月3日より順次、低温加熱型の加熱式たばこ用デバイス「プルーム・テック・プラス」において、専用たばこカプセル「メビウス・エナジー・モスコミュール・ミント」と「メビウス・エナジー・ピニャコラーダ・ミント」を、全国のコンビニエンスストア及び全国の一部販売店で発売している。

「メビウス・エナジー・モスコミュール・ミント」と「メビウス・エナジー・ピニャコラーダ・ミント」は、それぞれ「モスコミュール」と「ピニャコラーダ」のカクテルをイメージした、フレーバーメンソールタイプで、「メビウス・エナジー・モスコミュール・ミント」は、レモンとライムの香りにミントの刺激をプラスした爽快な味わい、「メビウス・エナジー・ピニャコラーダ・ミント」は、パイナップルやココナッツのような、トロピカルで濃厚な味わいを愉しめる。

商品概要などは次のとおり。

●**メビウス・エナジー・モスコミュール・ミント・プルーム・テック・プラス専用**＝内容物:たばこカプセル5本・カートリッジ1本入り／喫味:メンソールタイプ／価格:500円

●**メビウス・エナジー・ピニャコラーダ・ミント・プルーム・テック・プラス専用**＝内容物:たばこカプセル5本・カートリッジ1本入り／喫味:メンソールタイプ／価格:500円

話題

キャラクターをデザインした「たばこ」が話題に
㈱Plus Oneの「キャラタバ　北斗の拳」

株式会社　Plus　One（プラスワン）は、「キャラタバ（注①）北斗の拳」の4種類を、大阪府内をはじめとした一部のたばこ販売店及びコンビニエンスストアなどにて販売している。

「キャラタバ　北斗の拳」（「ケンシロウ」「ラオウ」「トキ」「ジャギ」の4種類。上は表面、下は裏面）

本製品は、日本で主流である香料をよく効かせたアメリカンブレンドではなく、香料を最小限に抑え葉たばこの本来の香りを生かしたバージニアブレンドで製造しており、外国産たばこ特有の喫味を抑えクセがないたばこを目指して生産している。

「キャラタバ　北斗の拳」には、「ケンシロウ」「ラオウ」「トキ」「ジャギ」の4種類のパッケージがあり、中身のたばこ自体は全て同じ喫味となっている。4種類ともに12本入りの300円で販売しており、タール値6mg・ニコチン値0.5mgである。

注①「キャラタバ」とは、キャラクタータバコの略語であり、プラスワン社はライセンスを取得した様々なキャラクターの入ったオリジナルパッケージのたばこを商品展開している。当社は、今後も様々なキャラクターによる商品展開を予定しており、自身で喫煙するたばこに『プラスワン』の意味を込め、プレゼント用等にも購入していただくことを期待している。

※本製品は、関係法令等に準じた財務省認可たばこ。

※本製品は、現在TSネットワークにて取り扱っていないため、お問い合わせは、下記までお願い致します。

◆株式会社 Plus One（プラスワン）・☎06-6537-7339

江戸川柳とたばこ⑪
玉たばこ

谷　匡輔（江戸川柳研究家）

明治21年（1888年）頃までの刻みたばこの包装形態のいろいろ。

「玉たばこ」と言うのは、たばこの葉の名称でもなく、また銘柄を言うのでもない。刻んだたばこを玉状に丸くまとめて、たばこ屋の店先に置いていたものである。従って〈国府〉の「玉たばこ」もあり、〈舞留〉の「玉たばこ」もあるというわけだ。

刻みたばこは、江戸時代から長い間親しまれてきたたばこであり、明治時代を迎えても最も一般的なたばこだった。刻みたばこを紙に包む風習は江戸時代初期から見られるが、包装した刻みたばこを商品として販売するようになるのは、江戸時代中期以降のことらしい。

三河屋弥平次が文政三年（1820）に著し、弘化三年（1846）に刊行された『狂歌烟草百首』には、《三十年前下野国那須郡黒羽の鈴木某が、初めて紙を使って文庫包みを製したが、これがたばこの角玉（角形包装）の興りである。その後、いろいろな地域で工夫し、たばこを糸や髪の毛ほどに細かく刻み、四八斤または五四斤入りの箱詰めにして、江戸に出荷するようになった（意訳）》と書かれた文章がある。文政三年（1820）の三十年前は寛政年間（1791～1801）の初期にあたり、この頃から刻みたばこを包装して商品とするようになったと考えられる。

さらに幕末期に入る頃、「かんな式」や「ゼンマイ式」と呼ばれるたばこの刻み機が考案され、店先で職人が包丁で葉を刻んで天秤計（てんびんばか）りで計って売るという方法から、刻み機によって大量に製造された刻みたばこを販売する時代を迎える。

それに伴ってたばこの包装形態も変化し、大量に刻んだ同じ長さの葉の小口を揃え、二五匁ずつ帯状の白紙で束ねたものを「玉造り（丸玉）」、五匁を丸く束ねたものを「小締め」または「小束造り」、楕円形に束ねたものを「楕形」などと呼んでいた。

江戸川柳に読まれた「玉たばこ」の句に、**楊枝一針縫い付ける玉たばこ**という句が拾えるが、これは刻みたばこに帯紙を巻いて、その端を楊枝で縫って止めている様子を読んだもの。**玉たばこ見せるたんびにゆるくなり**は、試喫用に玉たばこの一部を抜き取り過ぎて、巻きの具合が緩んだ様子を読んでいる。

これらの川柳から、パッケージに包まれた紙巻たばこを単に手渡しする現代とは違い、たばこ屋の店先で主人と客が会話を楽しみながら、ゆったりとたばこを選び楽しむ様子が目に浮かぶ。